

第7回 東井義雄賞「いのちのことば」の入賞作品発表会・記念講演会を開催しました



▲東井義雄賞の受賞作品を披露する受賞者の山脇麗香さん

2月27日、第7回東井義雄賞「いのちのことば」入賞作品発表会・記念講演会を但東町合の但東市民センターホールで開催しました。

この賞は、いのちの教育を探究し続けた日本を代表する偉大な教育者・東井義雄さん(但東町佐々木出身)の遺徳を顕彰し、その理念を後世に伝えるために創設したものです。

今回は、「いのちに目覚めさせられたあの一言」をテーマに募集したところ、全国各地から932編の作品を応募いただきました。

発表会当日は、最優秀作品の東井義雄賞5編を含む入賞作品100編(秀作10編、特別賞10編、佳作75編)を発表し、対象者に中貝市長から賞状や記念品などを贈りました。

また、式典終了後の記念講演会では、中貝市長が「命への共感に満ちたまちづくり」と題し、講演しました。

なお、同賞の募集は、今回で終了します。来年度以降は、東井義雄さんに関する教育フォーラムの開催など、「いのちの教育」を進めます。

《問合せ》教育委員会但東分室 ☎21-9036

私自身が、人生、命ということの裏返しである死というものに初めて対峙したのは、祖父が亡くなった大学生のときでした。彼の人生は彼のものであつて、ほかの誰のものでもないという、その当たり前の事実心に心を衝かれました。その他の人々の命、他の人々の人生を尊重せよということを私たちに突き付けているのではないかと思いました。

植村直己冒険賞の話です。歴代の冒険者たちは、冒険に臨むにあたって大切なことは「1歩ずつ1歩ずつ」と言われます。着実に歩いていくことで目的が達成されます。私たちの人生も同じことが言えます。この冒険賞は、命や人生ということにつながっているのではないかと思っています。



▲自身の体験談も交え、講演する中貝市長

私は、昼休みに円山川の堤防を歩いています。山々が取り囲んでおり、この山々は、大昔から人や生きものが生まれ、死ぬというをずっと見てきたんだろうなと思うと、ふっと心が穏やかになります。豊岡は、その永い命を持つものを大切に、この地で穏やかな人生を過ごしてもらえます。ようなまちづくりを進めています。

あらためて考えてみると、豊岡は1市5町が1つになつてきたまちで、それぞれのまちには、「命への共感」という共通点があることに気が付きました。水害で失われた命、東井義雄「いのちの教育」、コウノトリの野生復帰をしてきたまちなどがありました。

その歩み、経験を「命への共感」という言葉のもとにまとめ、それをこれからの豊岡のまちづくりの基礎に据えることができないかと、平成22年度に「(仮称)いのちへの共感に満ちたまちづくり条例」を制定したいと考えています。

記念講演会「命への共感に満ちたまちづくり」
中貝市長

「いのちに目覚めさせられたあの一言」

東井義雄賞(5編)

(状況は原文のまま表記しています)

語るための人生じゃない、生きるための人生だ

渡辺わかさん(東京都板橋区・26歳)

〈こぼれを受けたときの状況〉

26歳、女。事務職、恋人なし、転職1回、給与19万、都内一人暮らし。夢は、子どもに喜ばれる童話を書くこと。

これがいまのわたしです。大学を出て有名な企業へ就職したものの、仕事も環境も合わず毎日吐いて泣いてばかりでした。それでも収入はいいし安定しているしプライドもあるし、と頑張っていました。ある日色々なものがいとも簡単に壊れてしまいました。本当の自分はハイヒールもスーツも好きではない、と気づいたのは父親からのこの言葉です。見ていてよほど痛ましかったのでしょうか。

人生は一度きりです。どんな自分でありたいか、どんな風に生きて死にたいか、どういう人間でありたいのか。後悔のない生き方を選択したいと思っています。

私は幸せでした。一生懸命生きました。

横地里加子さん(京都女子大学・20歳)

〈こぼれを受けたときの状況〉

私は現在、大学の寮に住んでいます。ある日、クリスタルで作られた、あや

めの置き物が寮に届いたので。それを見て、寮監先生は、私に、かつて寮に住んでいた岸さんの話を語って下さいました。



岸さんは私が入寮する2年前に入寮してきた先輩で、彼女は病気であるにも関わらず、自ら家元を離れ、入寮を希望されたようでした。寮での岸さんは、決して人に甘えることなく、全て自分でやっていたそうです。車いすでありながら、特別扱いされることを嫌い、他の寮生と同じように過ごしていたようです。そんな岸さんでしたが、ある時病状が悪化し、亡くなってしまいました。亡くなる前に病院で岸さんは毎日日記を書かれています。それに書かれていたのがこの一言です。日に日に弱っていくことが実感できるのにも負けず、毎日一生懸命生きていたようです。岸さんの話は寮で、又、京都女子大学でも語りつがれるようになって欲しいです。

お腹がすくつて、幸せなことだっただね。お母さん、今日のご飯は美味しいね。

山脇麗香さん(山口県山口市・30歳)

〈こぼれを受けたときの状況〉

病気にかかり、4日間点滴をうけ食事をすることもできなかつた5歳の娘。

回復にむかつた5日目に、やっと食事の匂いに反応し、食べたいといいました。久しぶりに食事を少し口にしたら娘に、ほっとして「お母さんもお腹すいてきたよ。」と言ったときの娘の言葉です。お腹がすくということ、健康が当たり前と思っていたうぬぼれに反省しました。

君には出来ないことがある。でも、出来ないことの何倍も、人より気付けることがある。だから、胸を張っていたらいいんだ。

山本花梨さん(芦屋市・24歳)

〈こぼれを受けたときの状況〉



私は、生まれつき足に障害を負っているため、体育の授業がとにかく苦痛であった。みんなと違う、私だけ出来ない、という現実を目の当たりにせざるを得ないためだ。体育の時間になると、日頃とは打って変わって内向的になってしまふ私を気にかけてくださったのだらう。中学1年生の、恐らく5回目か、6回目の授業の後のこと。

担任でもあった50代後半の、普段は怒鳴り声しか上げない、いかつい体育の先生が、包み込むような笑顔と共に、体育館の隅で、私にかけてくれた生涯忘れ得ない励ましの言葉である。先生への警戒心、恐怖心が消失すると同時に、ありのまま

の自分でいることに対する自信が芽生えたのは、この言葉のお陰である。

子は親を選んで生まれるって言うのは嘘じゃっど。大事な命を与えてくれた親を選ばんで生まれてくるはずは、なか。

奥田益也さん(東京都葛飾区・65歳)

〈こぼれを受けたときの状況〉

小学3年生か4年生の頃、祖母から鹿兒島弁で聞かされた言葉です。一体なんのことやら幼い心には、まるで理解できませんでした。言葉がジワリと蘇ってきたのは、ずっと後の自分の子供たちが成長するに連れてでした。サラリーマンを辞め自営業として独立後、ままたぬ経営と暮らしの貧しさに悩み、幼い子供の寝顔さえ不憫に感じられ、溜息まじりに「この子も俺の子に生まれなければ」と呟いたとき、祖母の言葉が遠い記憶から蘇り、いや、この子は俺を親に選んで生まれてきてくれたんだ」と思い直していました。

親子の絆を深めようとする努力が空回りしたり、他人のような冷めた視線を向けられたこともありましたが、そのたびに祖母の言葉を反芻してきました。孫のいる身になった今、祖母の言葉がしみじみと心に響いてきています。

入賞作品1000編は、書籍にまとめ、1冊6000円で販売しています。希望の方は、東井義雄記念館(☎21-9036)へ申し込みください。